

「琉球王国の衣装」展 ロサンゼルスにて開催!



沖縄の歴史と文化を米国市民に理解してもらう目的で、沖縄県立博物館と米国ロス市在の民芸工芸博物館 (CRAFT & FOLK ART MUSEUM) との共催、北米沖縄県人会の後援を得て、琉球王国時代から続く伝統的染織衣装を主体にした展示会が平成7年11月10日～平成8年1月14日まで開催されました。また、平成7年度は、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年でもあり、別の展示室で、戦災によって破壊された沖縄や廃墟の中から復興した沖縄の姿も写真パネルで紹介されました。

紅型を中心にした衣裳は「ドラゴンの輝きー琉球王国 (沖縄) の衣装ー」“Splendor of the Dragon: Costumes of the Ryukyu Kingdom” というタイトルの元で、庶民の衣装、士族の衣装、踊り衣装、紅型衣装と分けて展示されました。この展示会は、アメリカ本国において、琉球王国の伝統的衣装が公開される初めての機会となりました。

平成7年11月10日 (金) の午後5時 (特別開會式) と午後7時 (一般開會式) の2回に分けて開會式が行われました。イーラ館長による展示会趣旨についての説明と沖縄県へのお礼の言葉の後で、沖縄県を代表して仲里長和教育長があいさつをしました。引き続き北米沖縄県人会芸能部による琉球舞踊が行われ、盛況のうちに開會式が終わりました。

約2ヶ月の開催期間中には、下記の通り様々な催し物がとり行われました。

講演日時: 1995年11月11日 (土)

1. 「紅型の歴史と技法」

講師: 與那嶺一子 (沖縄県立博物館学芸員)

2. 「琉球の絃」

講師: メリー・ドゥッゼンバーリー
(スパンサー美術館学芸員)

3. 「展示解説会」

講師: グロリア・ゴーニック
(民芸工芸博物館学芸員)

紅型勉強会 日時: 1995年11月12日 (日)

講師: 神谷クリスティーナ

講演日時: 1995年11月21日 (火)

「沖縄: 衣装の歴史」

講師: グロリア・ゴーニック
(民芸工芸博物館学芸員)

講演とパネルディスカッション

日時: 1995年12月3日 (日)

講演「沖縄の歴史」

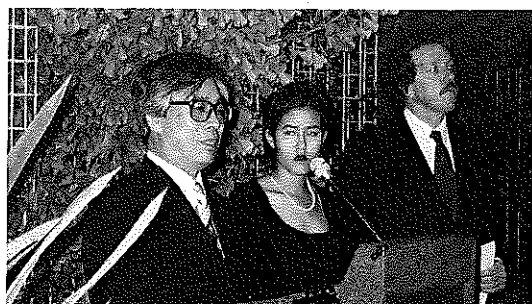
講師: 崎原 貢
(ハワイ国際大学学長)

ファミリーフェスティバル

日時: 1995年12月10日 (日)

ワークショップ: ファミリーヒストリー

日時: 1996年1月7日 (日)



開會式 (左 仲里教育長・右 イーラ館長)

ボランティア養成講座終わる！

シンポジウム「これからの博物館：女性学芸員は語る」

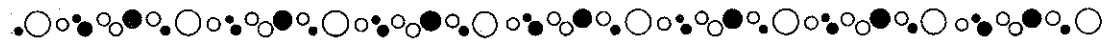
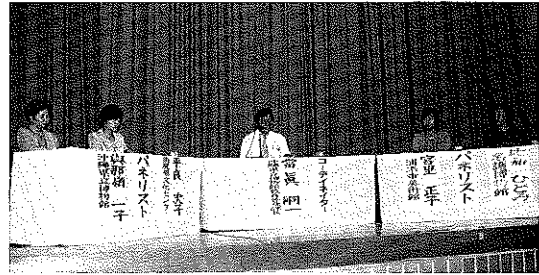
コーディネーター	： 當眞 嗣一	(沖縄県立博物館教育普及課長)
パネリスト	： 比嘉ひとみ	(名護博物館学芸員)
	宮里 正子	(浦添市美術館学芸員)
	平良 次子	(南風原文化センター学芸員)
	與那嶺 一子	(沖縄県立博物館学芸員)

このシンポジウムは、沖縄県立博物館でこれからボランティア活動を希望する皆さんのために用意した7回講座の最終講座として行われたものです。

それぞれの館の活動状況、課題を発表していただき、受講生の皆さんが博物館の現況を理解できるようになることを願い、企画しました。

比嘉ひとみさんの方からは、ぶりでい博物館という子どもを対象にした事業が地域の人たちの協力を得ながら進められてきたこと、宮里正子さんの方からは漆器を子供たちが理解できるようにワークシートを作成したり、織物の生地などを触って学べる工夫をしたことなど、平良次子さんからは、南風原文化センターの展示企画がセンターに足繁

く通ってくる人たちのアイディアに支えられていることなどが話されました。與那嶺一子さんの方からは、母親として子を育てながら仕事でもがんばるとき、それをプラスに転化させていく発想の大切さなど、貴重な体験談を話していただきました。



博物館シアター 「ミュージアムコンサート」

県立博物館では、生涯学習の場として県民のみなさんが気軽に足を運び、博物館を十分に利用いただくため、博物館シアターを平成6年度より、実施いたしております。博物館シアターはジャンルにとらわれず、幅広く総合的な内容のものとし、映写会や公演会等を毎月1回、日曜日の午後2時



歌：宮里優子さん ギター：福地泰邦さん

より、実施してまいりました。

平成7年度は「映像で考える戦争」、「夏休み親子シアター」「世界の名作」、「ミュージアムコンサート」、「黒澤明の世界」の5つのシリーズに分け映画やミニコンサートを実施しております。去った12月3日(日)の第21回博物館シアターでは、福地泰邦さんのギターと宮里優子さんの歌で、「歌とギターで誘うわらべ歌の世界へ」と題して、ミュージアムコンサートを実施いたしました。会場では親子連れの観客が多く、クラシックギターと歌に魅了され、熱心に聞入る姿が見られました。また、会場全体での合唱も行われ、演奏者と観客が一体になり、なつかしいわらべ歌を親子で歌い楽しむ姿も見られ盛況のうちに閉会し、コンサート終了後多くの参観者から、有意義な企画であったとの声がかかれました。

子ども体験学習教室の仲間が 作文で優秀賞に！

平成6年8月に行われた体験学習教室においてシーサー作りを行いました。その時参加していた森山彩さん（城東小学校4年）がその時の様子や感じたことを作文と図画に表現し、沖縄タイムス図画・作文・書道コンクールの作文の部で優秀賞、また図画の部で優良賞、ヤマハの作曲コンクール、そのほかにも郵便ハガキのデザインコンクールでも賞をいただき、シーサーで4部門の賞を受賞しました。その作品をご紹介します。

【シーサー作りに参加して】

森山 彩（城東小学校4年）

「えーっ。シーサー作るの。」

その時、私の頭にはシーサー作りで有名な島常賀さんの顔が浮かびました。私が初めて島常賀さんのシーサーを見たのは、琉球村にある屋根の上のシーサーと比嘉酒造の入口の両わきに立っている二ひきのシーサーです。とつてもがんじょうそうで、今にもその場所から飛び下りてきそうな、すごい迫力のあるシーサーでした。体験学習の前の日は、シーサー作りの事で頭がいっぱいで、なかなかおぼれませんでした。

いよいよ漆喰でシーサーを作ろうという体験学習の日になりました。沖縄県立博物館で夏休みの三日館、家族4人で参加しました。私は三日間でどんなシーサーが作れるのかなあとワクワクしてきました。さか立ちシーサーや口を大きく開けているシーサーや、口を閉じているシーサー、しゃみせんをひいているシーサーなど、沖縄にいるおもしろい表情のシーサー達を私は思い出してきました。そして今度は、私のアイデアしたシーサーを作る番です。

「よし、がんばって島常賀さんに負けないくらいのシーサーを作るぞ。」と心の中でファイトがわいてきました。

開校式の時、講師の先生の自己紹介がありました。講師の先生の名前は、金城登先生と言って、首里高校の染織科の先生です。先生は、まじめな

顔で話をしていたけれど、突然「シーサー作りが楽シーサーと思いついて作って下さいね。」とダジャレを言ったので、会場いっばいに笑い声が広がりました。金城先生は、「ぼくは、むずかしい話よりも、物を作る楽しさを経験してほしいなあと思います。」と言って開校式は終わりました。私たちの作るシーサーは、漆喰と赤がわらを使って作ります。

漆喰とは、サンゴを焼いて粉にした石灰に細かく切ったわらとセメントを水でまぜ合わせたものです。漆喰と赤がわらを前に、私のシーサー作りのスタートです。ワクワクしながら漆喰をつかんでみました。ベチョベチョして、どろんこ遊びの気分です。どんどん作っていくと、くるりとまがったかわらのしっぽがついている、チビタッチウのシーサーができました。キラリと光ったびー玉のような目、口の中の小さなかわらのきば、ぷくくとふくらんだシーサー鼻、そばで見ると、「変わったしっぽだなあ。君の顔を見ているとなんだか笑いたくなるよ。」と私はシーサーに、小さな声で話かけました。

次は私の一番楽しみだった色づけです。「今できたシーサーは、漆喰顔のシーサーで、しっくりしないけど色づけはみんなのお母さんが、お化しようするみたいにやっつてね。」と金城先生は、ニコニコして話をしていました。私のシーサーは、目もとと口もとに赤と黄色のお化しようをして、赤と黄色と黒のうずまきを描きました。何だか、オシャレな洋服を着けたかわいいシーサーのようです。

私が色づけが終わったところ、しばふの上にみんなのけつ作が並びました。今まで見た事もない、ゴジラシーサー、小錦シーサー、トトロシーサー、筋肉マンシーサー、等を見てみると、まんオシーサーの家族みたいで、おかシーサーと笑いが止まらなくなりました。

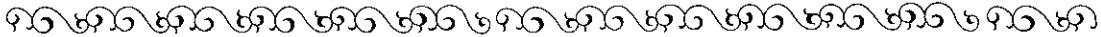
修了式の時、金城先生の話がありました。「三日間、自分の手で作ったシーサーは、世界にたった一つです。みなさんほこりに思ってくださいね。」と言っていました。先生から、修了証をも

らった時、私の手のひらは少しかたい感じで、指がまげにくく、かわいてカサカサでした。三日間漆喰を使ったためかなと思って、手のひらをじっと見てみました。白く細い線が枝のようになっています。

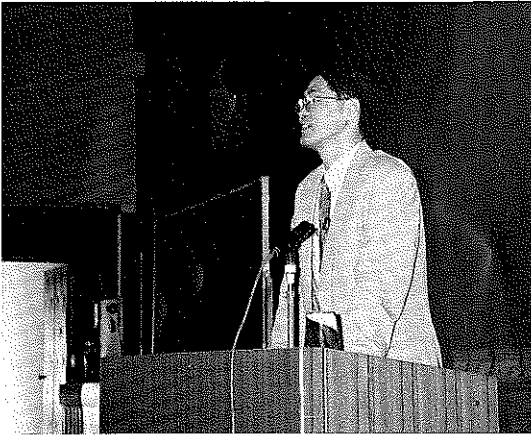
ふっと、この形何かににているなあ、サンゴかなあと心の中で思いました。サンゴは焼かれて灰になったのに、漆喰に生まれかわって、それで、私はシーサーを作ることができました。最後にまた、私の手の中で、手のひらサンゴになってもどってきたのかなと不思議な気持ちでした。そして、その手でシーサーの頭をそっとなでてみると、「ほくは、サンゴから生まれたサンゴシーサーだよ。ほくの事、いつまでもかわいがってね。」と言ったような気がしました。

私の家にいる四ひきのサンゴシーサーの家族は私の宝物として、いつまでも大切にしようとおも

いました。大きい二ひきのサンゴシーサーは、おじいちゃんとおばあちゃんに、いつまでも健康でいますように、長生きシーサーと名前をつけて、私と弟から、けいろうの日のプレゼントにしました。



平成7年度文化講座報告



(第256回文化講座「中国からきた風水思想」)

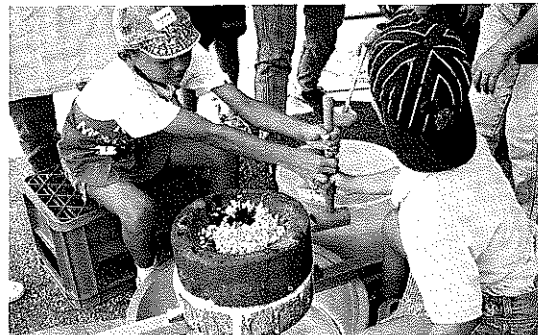
平成7年度は第248回の「在米国沖縄関連文化財について」の園原謙(県教育庁文化課専門員)に始まり、特別展の際には、門奈直樹(立教大学教授)をお迎えして「米軍統治下の言論統制」と題し、貴重なお話を頂きました。またその他にもさまざまな内容の講座が行われました。

12月16日(土)に行われた第256回の「中国からきた風水思想」では沖縄国際大学の小熊誠教授が中国の風水の状況を「龍虎の村」を実例にあげて紹介しました。また、沖縄の風水思想の伝来や首里城と風水の関わりなどをわかりやすく、お

話して下さいました。当日は204名もの聴衆がためかけ、風水への関心の高さが伺えました。

今年度の夏休み歩く・見る・作る教室では「サンゴ礁の生きものたち」と「親子スケッチ会」が雨のため中止でしたが、8月26日(土)に30人の親子を対象に行われた「豆腐作り」では座間味村教育委員会派遣社会教育主事の山中久司先生の指導のもと昔ながらの方法で豆腐作りを行いました。

石臼で大豆を挽いたり、にがりのかわりに、座間味の海水を使って豆腐を作るなど、参加者は親子そろって「昔の生活の様子をかいま見る事ができる良い機会」と苦労しながらも楽しく学習していました。



(初めて使う臼に悪戦苦闘しながらも一生懸命)

第1回宜蘭県交流展準備調査報告

平成6年5月に、台湾宜蘭県より沖縄県立博物館と同県立文化センターとの間で交流展覧会を開催したいとの提案がありました。そこで、平成7年度に交流展準備のための現地調査を行いました。

調査は9月7日から9月14日までの8日間、真玉橋副館長・當眞教育普及課長・嵩原と太田の4名で行いました。展覧会で展示可能な資料の調査を実施し、交流展開催に向けての予備会議が開かれ諸問題について検討協議しました。

那覇空港を出発し約1時間、台北国際空港に到着しました。台北駅から北回りの列車に乗り、東海岸沿いの田園地帯をぬけ、約1時間半で宜蘭駅に到着しました。宜蘭県は、晴の日には与那国島から見渡すことができるほど近く、歴史的にも沖縄との交流が深かった地域です。

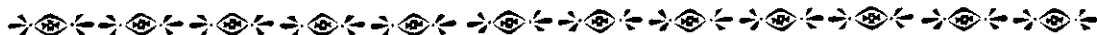
9月9日～10日は仲秋節にあたり、台湾各地でさまざまな祭が行われますが、本調査団も宜蘭県の祭に参加することができました。また、宜蘭県庁・同県立文化センター・孝威小学校・親水公

園等の施設、寺廟・丸山遺跡・琉球移民旧居地等の史跡、布馬陣・傀儡戯・獅子舞・布袋戯等の伝統芸能や棲蘭山の自然などを参観しました。特に、孝威小学校が伝統文化保存に貢献していることが印象的でした。指人形を操る児童の布袋戯クラブの活動、空き教室を利用し民具等を展示している地方文物室が設置してあります。

宜蘭県滞在中は、行く先々で盛大な歓迎を受け、調査にもご協力いただき感謝しています。



宜蘭県立文化センター林主任と真玉橋副館長



沖縄の工芸展

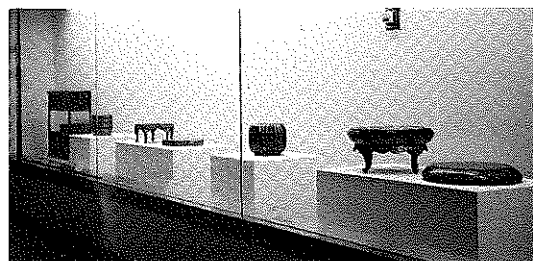
長野県・奈良県・千葉県において開催

沖縄の工芸美術の優品を「漆器」「陶器」「紅型」「織物」の四つの分野によって展示し、琉球王朝以来の伝統美を受け継ぐ繊細な工芸美術と、日常生活に適合した素朴で逞しい「用の美」とを総合的に紹介するという開催趣旨で、奈良県立美術館を皮切りに長野県信濃美術館、千葉県立美術館の三館を巡回する「沖縄の工芸美術」展が平成7年7月～10月にかけて開催されました。(7月1日～7月30日：奈良県立美術館／8月5日～9月3日：長野県信濃美術館／9月9日～10月8日：千葉県立美術館)

三館において「沖縄の工芸美術」を紹介する展示会が開催されたのは、これが最初となります。当県立博物館の漆器・陶器・紅型・織物資料を中心に日本民芸館、東京国立博物館、鐘紡繊維美術館からの染織資料を加えた136点の資料が展示替

えも含め公開されました。

それぞれの館では、沖縄の工芸美術をテーマに各々の館での解釈を加えた展示構成がなされました。奈良県立美術館では王朝文化にスポットが当てられ、長野県信濃美術館では県立芸術大学の学生による琉球舞踊公演が加わりました。また、千葉県立美術館では民俗的な色彩を強調した展示となりました。



奈良県立美術館での展示の様子

第19・20回移動博物館 渡嘉敷村・国頭村



渡嘉敷村中央公民館

沖縄県立博物館では、博物館の利用に不便を感じる地域の方々に、博物館活動の一端にふれて頂くため、昭和54年度から「移動博物館」を実施してきました。平成7年度は2回の実施となり第19回を渡嘉敷村の中央公民館で、平成7年11月18日(土)・19日(日)の2日間、また第20回を国頭村総合体育館で、平成7年11月25日(土)・26日(日)の2日間開催いたしました。

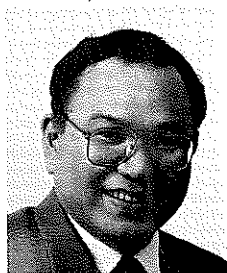
展示内容は考古、歴史、自然、美術工芸、民俗の5分野からなり、総展示数は300点余りにのびました。また、渡嘉敷村では、文化講座を「渡嘉敷の昆虫たち」という演題で、小浜継雄先生

(沖縄県ミバエ対策事業所 主任研究員)を講師に迎え開催し、国頭村でも「おもろさうしにみる国頭」という演題で波照間永吉先生(沖縄県立芸術大学 教授)を講師に迎え開催いたしました。その他にも両村で「自然観察会」を県立博物館学芸員の指導で、地元の小中学生と父母を対象に実施いたしました。

移動博物館の開会式では、開催地の小中学校の児童生徒代表が参加し挨拶を行いました。その中で国頭中学校3年生の宮城鈴香さんは「私は沖縄に住みながらこれまで、沖縄の歴史や文化にふれる機会があまりありませんでした。移動博物館は先人たちが残してくれた文化遺産が、現在どのように私達の生活に生かされ、私達を精神的にも物質的にもはぐくんでいるのかをじかに感得するよい機会であり、また文化遺産を通して郷土の歴史に思いをはせ、将来を考え、今を努力することは、これからの私達にとって大切で、移動博物館から多くのことを学びたいと思います」と移動博物館への期待を述べました。今回の移動博物館では、両村での開催期間中多くの入場者があり、盛況のうちに閉会いたしました。



九州国立博物館誘致のための文化講演会 多くの聴衆つめかける



宮城昌保氏



田中 琢氏

平成7年11月4日(土)に県立博物館講堂にて九州国立博物館誘致のための文化講演会を行いました。(主催：九州国立博物館誘致推進本部

共催：沖縄県教育委員会)

この講演会は「九州の太宰府」に国立博物館を誘致するため、広く国民の理解を得るとともに歴史に対する幅広い関心に応えるため、九州各県において実施しています。沖縄は平成4年にも開催しており、今回は2度目となりました。

講演は「沖縄の食文化」と題して沖縄大学講師の宮城昌保氏に、「琉球考古学」と題して奈良国立文化財研究所長の田中琢氏に興味深いお話をして頂きました。

当日、聴衆は約260名と立ち見ができるほど、多くのかたが集まり、大盛況のうちに終了しました。

特別展「甦る沖縄」を終えて

太平洋戦争・沖縄戦終結50周年事業の一環として、特別展「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」(1995年6月20日～7月30日)を開催しました。

戦後の廃墟の中から立ち上がって生活文化を再建し、文化財の収集・保存・復元に取り組み、本土や海外からの支援と協力も得ながら沖縄文化をみごとに復興させてきた県民の努力の足跡を2万点余の資料と写真で一堂に展示紹介しました。

展示は3つのコーナーに分かれ、Ⅰ「甦る沖縄」、Ⅱ「もう一つの沖縄社会」、Ⅲ「海を渡った文化財—在米国沖縄関連文化財—」でした。一口に戦後資料とはいっても、50年間の膨大な社会事象を包含していて、恒例の1週間の展示作業は従来より増して難渋し、職員は毎晩遅くまで、徹夜に近い日々が続きました。

期間中、約1万5千人余の観覧者があり、復元の規格住宅に展示された終戦直後の生活用品、川での洗濯風景やDDT散布の写真を懐かしげに見て話し込む人たちが数多くありました。慰霊の日に入館無料だったこともあり約1,300名、また最終日にも1,200名の入館者がありました。残念だったのは、学期末の時期もあってか、ぜひ見てもらいたい学校の団体見学が少なかったことです。夏

休みに入ると、親子連れの見学者であふれていました。

感想文には、「大変よかった。資料豊富で、ぜひ県民・国民全体でみてほしい。」「父がなにげなく語る子どもの頃の世界だった。私の祖父は宮古で民具をつくっているの、祖父にも見せたかった。来年もあつたらよいですね。」などの意見が寄せられ、職員の労も報われる思いがしました。

また、今回の展示会では在米の沖縄文化財が里帰りし、米国の博物館・美術館関係者、沖縄県人会の方々の来館が頻繁にあり、県立博物館の今後のネットワークづくりに一石を投ずるものになりました。



「カバヤ」の復元

感謝をこめて…

解説員: 桃原みどり

「資料を送って頂き、本当にありがとうございました。」

「港川人を見せてくれて楽しかったです。」

「本を見せてくれてありがとう。」

「沖縄の観光地をいろいろと教えて頂き、大変有意義な沖縄旅行をすることができました。」

ここに記した言葉は、沖縄県立博物館来館後に手紙や葉書によるお礼の数々です。時には、他府県から再度来館する学生もおりました。案内コーナーという博物館の中で、最も多く、来館者の方々と接することのできる私は幸せです。イボイモリや高麗瓦、明刀銭、寛永通宝などを持参する方々

や更なる知識を求めて足を運ぶ方々がいます。その度に私の知識は広がっていきます。来館者の質問は私の見えなかった部分を開かせてくれる道となります。難しい言葉でなら本に任せておいて、かみ砕かれた分かり易い言葉での説明は、やはり解説員ならではの伝達方法があると思います。来館者と、一方通行ではない、何度でも往来できる道づくりを望みます。

いろいろな言葉を頂くばかりで、本当は私の方が感謝の気持ちをお返ししなくてはなりません。知識と喜びを与えて下さる来館者の皆様に感謝いたします。

